



Title	中国語母語日本語学習成功者の学習行動：アンケート調査とフォローアップ調査から
Author(s)	陳, 奕霖
Citation	大阪大学言語文化学. 2021, 30, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語母語日本語学習成功者の学習行動¹

—アンケート調査とフォローアップ調査から—*

陳 奕霖**

キーワード：日本語学習成功者、学習行動、有利さ

70年代后，以欧美为中心，针对“Good Language Learners（优秀的语言学习者）”为对象的研究盛极一时，其研究对象多为以欧洲诸国语言为母语的学习者，至今鲜见与“以中文为母语的日语学习成功者”的相关研究。另一方面，在世界各地众多的日语学习者中，各种言论都表明中文母语者学习日语是相当有利的。然而，对于这些有利因素具体指什么、如何被利用却无人问津。为探究上述有利因素，日语学习成功者可以作为理想的研究对象。但，在有关语言学习成功者的研究中，量的研究比比皆是，与其相对的质的研究却始终存在缺口。对于试图探明上述问题而言，量的研究不足以看出具体的原委，因此，质的研究手法在此尤为重要。

基于上述背景，本文以“以中文为母语的日语学习成功者”为研究对象，运用质的研究手法对成功者所采取的学习行动展开探究，并由此进一步探究出对于汉字圈的日语学习者而言，其所特有的有利因素为何，以及是如何对这些有利因素展开灵活运用。

本文通过对成功者学习行为的分析，首先得出对于成功者而言，相比于直接型策略，间接型策略的运用更受重视。其次，根据成功者学习行为的特征进行进一步归类，可大致分为五个类别，可以简单概括为“不偏不倚地掌握基础知识与四技能”、“积极发挥自我调节能力”、“巧妙利用周边环境与资源”、“从蓝图到细节独自进行学习管理”、“根据学习情况及阶段及时调整策略”。最后，基于上述五个类别，以成功者对日语学习过程的详细描述为例，加以更详尽的分析与考察。通过关联总结具体的学习行为，得出一条以中文为母语的日语学习成功者所独有的规律。即为，成功者利用“汉字”这一优势，在早期的日语学习中，以使用“书面语言”素材为中心对日语进行理解，在这一过程中已对日语有一定程度的掌握；随着日语等级的提升，成功者逐渐意识到向“声音语言”过渡的必要性，进而更多地选择“声音语言”素材作为日语学习资料。而上述过程，恰好符合本文中所指出的

¹ 本研究の学習行動の主要な部分は学習ストラテジーである。日本語学習成功者に対する調査の結果から抽出した学習行動の共通点は、学習ストラテジーと学習の過程や段階における行動の変化や特徴の大きく2つに分けられるが、ここでは便宜上、それらを「学習行動（の共通点）」と総称する。（詳細は4.1を参照）。

* 以中文为母语的日语学习成功者的学习行为调查研究（陈 奕霖（CHEN Yilin））

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

“以中文为母语的日语学习者，借汉字之优势，可以在早期学习中通过书面语言在一定程度上理解日语，在此之后，再将日语进行声音化处理即可达到更高效的学习。”也就是说，成功者是懂得如何有效利用母语这一优势的。

通过探明中国国内日语学习成功者的学习行为不仅可以为其他学习者提供有价值的参考，也可以为今后的教育企划带来新的启示。将这些研究成果运用到实际教学中，或许会使日语学习达到事半功倍的效果。

1 はじめに

近年、海外留学がブームになるとともに、日本に来る中国人留学生がますます増えている。日本に留学している中国語母語話者の多くは、極めて高い日本語能力を持っている。また、様々な議論から、中国語母語話者は他の言語の母語話者に比べ日本語学習に有利であると言われている。その理由は、端的に、中国語と日本語では漢字という共通の文字が使用されていることに帰せられることが多い。このような議論があるにも関わらず、優れた日本語学習者に関する研究の中で、中国語母語話者を対象とした研究は見当たらず、中国語母語日本語学習者にとっての利用可能な有利さ²やその実態についての課題も未だ明らかにされていない。一方で、同じような日本語教育環境の中でも、優れた学習者とそうではない学習者がいる。そのため、学習者の学習方法や学習行動を通してそれらの課題を明らかにする必要があるだろう。

本研究は中国語母語日本語学習の「成功者」³（竹内, 2003; 吉田, 2017）に注目し、質的手法としてのアンケート調査とフォローアップ調査を通して、学習成功者の学習行動について探究する。その中で、漢字圏の学習者の日本語学習に利用可能な有利さは何か、どのように作用しているのかについて検討する。

2 先行研究および本研究の課題

2.1 母語と目標言語の要因について

第二言語・外国語習得の結果は母語と目標言語の影響を受けており、母語と目標言語の関係を議論する際には言語間の距離で解釈することが多い（竹内, 2003; 大関, 2010 等）。言語間の距離に関する研究では、ヨーロッパ言語を中心に行った研究が多いが、アジア言語、例えば、中国語と日本語の言語間の距離についての先行研究はまだ見られない。その原因については以下のように解釈できると考えられる。ヨーロッパ諸言語の多くは印欧祖語に由来するため、語源が同一である言語が多い。Zeevaert, L & Thije, J. D. ten

² 本研究での有利さは日本語学習を促進させる働きを持っているものを指す。

³ 言語学習「成功者」という言葉は竹内（2003）、吉田（2017）等の研究で使用されている。

(2007)によると、2つの言語間の同源の割合が高ければ高いほど、この2つの言語の距離は近い。しかし、中国語と日本語の場合はヨーロッパ諸言語の場合とは異なり、言語間の距離という概念で解釈できないと考えられる。なぜかという、ヨーロッパ諸言語はアルファベットの言語で、音声に依存する言語であるのに対し、中国語や日本語は漢字を有する言語で、いわば書記言語に依存する言語であるからだ。日本語の常用漢字の98.1%は中国語の漢字と重なっているという菱沼（1983）の指摘以外に、小森（2013）は日本語における漢語の約4分の3が中国語でも用いられている日中同形語であり、さらにその同形語の3分の2が日本語と中国語の両言語で意味が同じ同形同義語に分類される語であると指摘している。つまり、中国語と日本語は同じ文字である漢字を共有しており、中国語と日本語は関係の強い言語である。

ここから、中国語母語の日本語学習者にとって、漢字という共通の文字が有利に働くことは容易に推察できるだろう。この点で、他の言語の母語話者に比べ、中国語母語話者は早い時期から書記日本語のテキストを学習リソースとして利用できるという利点があると言える。共通する漢字のおかげで、中国語母語話者は書記日本語を優先的に学習することができる。つまり、中国語母語の日本語学習者の学習リソースとして、書記日本語は日本語の意味を理解しながら学習でき、その上で日本語を音声化すればいいという漢字の共通性に基づく大きな有利さを有するだろう。

ところが、中国語母語話者全員にとってこうした点は有利であるものの、ほぼ同様の日本語教育環境でも、優れた学習者とそうではない学習者がいる。そのため、学習者の学習行動や学習戦略に着目する必要があるだろう。本研究は中国語母語日本語学習成功者に注目してこの課題を探究する。

2.2 学習戦略と外国語学習成功者について

学習戦略とは何であるかについて、Oxford (1990, p.8) は「学習をさらに容易に、迅速に、楽しく、自主的に、効果的に、そして新たな状況にさらに応用できるようにするために学習者がとる具体的な行動である」と定義している。そして、Oxford (1990)によると、学習戦略には直接戦略と間接戦略の2つの種類があり、直接戦略の下位に記憶戦略、認知戦略、補償戦略がある。間接戦略にはメタ認知戦略、情意戦略、社会的戦略の3つが包括されている。また、O'Malley & Chamot (1990) では、戦略をメタ認知戦略、認知戦略、社会・感情戦略の大きく3つの種類に分け、それぞれの戦略の下位にはより詳細な概念が含まれていると説明されている。

70年代以降、学習ストラテジーについての研究が盛んになり、“good language learners” (GLLs) を対象にする研究が主流となった。そのような成功者についての研究は主に欧米を中心に行われ、優れた学習者のストラテジーの共通性がまとめられている (Stern, 1975; Rubin & Thompson, 1982; Thu, 2009 等)。ところが、そのような研究の結果の多くは学習者自身の視点から引き出したものではなく、授業観察や教師の経験をもとに間接的にまとめたものである。また、欧米を中心とした言語学習成功者に関する大量の研究に対し、アジアにおける研究は非常に少ない。日本国内では、貴重なデータを提供した研究として竹内 (2003) や吉田 (2017) が挙げられるが、それらのほとんどが英語を目標言語とするものである。

中国語母語話者の日本語学習に関する研究で、学習成功者の学習行動に関する研究は見られないが、一般学習者の学習ストラテジーについての研究は少なくない。しかし、その大部分は、Oxford (1990) によって開発された SILL (Strategy Inventory for Language Learning) の質問票を用いた技能別のストラテジーと他の変数との関係についての量的研究である (中上, 2015; 呉ほか, 2016 等)。SILL 質問票は利用しやすく、量的研究には利点がある一方で、様々な問題点もある。竹内 (2003) は、この質問票に含まれるストラテジーは北米圏で行われた研究から抽出したので、北米圏の価値観や学習環境に影響される可能性があるため、アジアで実施すると様々な問題が生じる可能性がある」と指摘している。そのため、中国の学習者の実態を考慮せずに同じ枠組みの中で論じるのは不適切であろう。また、Cohen (1998) は SILL 質問票を用いる量的研究では、学習の段階、状況などといった学習ストラテジーと関係がある変数について説明できないという限界を指摘した。Dörnyei & Ryan (2015) はストラテジーについての研究において、ひたすら量的研究をするのではなく、質的研究の必要性にも目を向けるべきだと主張している。

2.3 先行研究の問題点および本研究の課題

以上の先行研究から、主に2つの問題点があると考えられる。まず、一般的な中国語母語日本語学習者を対象にした技能別ストラテジーの研究はあるが、「成功者」の学習行動全体を対象にした研究は見られない。また、他者の視点から間接的に成功者のストラテジーをまとめた研究や SILL を用いて学習ストラテジーを分析した量的研究がほとんどであり、学習者の学習環境、状況、段階などを重視し、学習者視点から引き出した学習行動に関する質的研究は欠けている。学習者の学習行動を明らかにするためには、どのようなストラテジーを使用したかのみならず、学習の状況や段階によっての学習行動の特徴や変化も明らかにしなければならない。

以上のように、従来の研究方法では、中国語母語日本語学習成功者の学習行動にはアプローチできず、漢字圏の学習者が日本語学習においてどのような有利さをどのように利用できるのかについて探ることが困難だと判断される。そこで、本研究では質的手法により中国語母語日本語学習成功者の学習行動を探求することから出発する。

3 調査概要

3.1 調査対象

外国語学習成功者に関する研究は少なくないが、研究によって「成功者」についての定義は異なる。本研究では、日本語学習成功者に見られる仮の条件を「成功に到達する水準」(条件①②)、「成功に到達する時間」(条件⑤)、「成功に到達するまでの日本語経験」(条件③④⑥)を基に、以下の6つに定めた。

- ①日本に留学する前にN1試験に合格したこと⁴
- ②交換留学の経験があること、または日本の大学院に合格したこと⁵
- ③中国で生まれ、中国語を母語とすること⁶
- ④家庭での言語使用で日本語は日常的ではないこと
- ⑤12歳以降に日本語学習を始めたこと⁷
- ⑥中国国内での日本語学習を主とすること

3.2 調査方法

2.2と2.3で論じたように、中国語母語日本語学習成功者に関する研究は見られず、従来の研究方法では、中国語母語日本語学習成功者の学習行動をうまく解明できていない。学習の状況や段階を考慮に入れつつ学習行動を明らかにするためには、日本語学習成功者から学習活動の経験を直接引き出すことが可能な質的手法を採用することが適切であろう。そこで、本研究では学習者の内面を重視する内省法を用い、学習記録調査というアンケート調査を実施することにした。

3.3 調査項目の設定と抽出

本研究では2.2で紹介したOxford (1990)とO'Malley & Chamot (1990)の学習方略の

⁴ 留学する前に、日本で1ヶ月以上滞在した経験があり、また中国に戻ってからN1に合格したような場合は除外する。

⁵ N1試験には話す能力を評価する項目がないため、口語能力は留学の事前面接のような資格審査によって評価される。

⁶ 「中国語を母語とする」については方言などを母語とすることもあるが、本研究は第二言語習得論の観点から、「第二言語」(「外国語」)に対する「母語」を中国語と汎称する。

⁷ 臨界期という年齢的要素の影響が生じないように配慮する。

分類方法を参考にし、調査項目を想定し得られたデータから抽出した⁸。認知ストラテジーのうち記憶、復唱などは、「技能別の学習方法」についての記述内に現れると考えられるため、聞く、話す、読む、書く、語彙や文法の項目がアンケートで提示されている。具体的で細かい認知ストラテジーに対し、メタ認知ストラテジーは学習の全体を見渡す大きな概念であるため、「学習目標と計画について」という調査項目が設置されている。また、社会・感情ストラテジーは直接的な記述からではなく、学習経験に関する全体の記述から間接的に抽出できるだろう。最後に、中国語母語の日本語学習者にとって、漢字という共通の文字は有利に働くため、「学習の過程でどのように母語の中国語を活用したか」という質問項目を意図的に設定し、成功者たちが母語をどのように使用しながら工夫をしているのかについて考察したい。

また、協力者の学習行動を解明するためには、学習者の学習ストラテジーの使用のみならず、学習の過程や段階における行動の変化や特徴、すなわち、習得の行程⁹についても解明する必要がある、学習経験をストーリーのように語ることでより詳細に明らかにできると考えた。協力者には日本語学習を「初級」「中級」「上級」の3つの段階¹⁰に分け、自分の学習経験をなるべく詳しく語ってもらった。

表1 調査項目と段階分け

初級	①学習目標と計画について
中級	②技能別の学習方法（聞く、話す、読む、書く、語彙や文法）
上級	③学習の過程でどのように母語の中国語を活用したか
	④その他特に重要だと思われること

以上の観点の下に、日本語学習記録調査のアンケートを作成し、協力者10人¹¹を対象に調査を実施した。調査票等の送付と回収はメールで行ったが、曖昧な回答の確認や興味深い回答の掘り下げのためのフォローアップ調査はSNSで実施している。

4 日本語学習成功者の学習行動から見た特徴

4.1 日本語学習成功者のとる学習行動

中国語母語話者の日本語学習において、何がどう有利なのかを探り出すためには、日

⁸ 調査項目の一部は竹内（2003, pp.79-81）を参考にした。

⁹ 「学習プロセス」は学習者の内面的な変化を強調しているが、本研究の「習得の行程」は学習段階、すなわち、学習者が徐々に日本語学習の達成に近づく過程に重点を置いている。

¹⁰ この調査での学習段階は「初級」「中級」「上級」の3つに分けられ、協力者の判断でそれらの段階分けを行い、語ってもらった。

¹¹ 大学で日本語を専攻した人は9人、経済を専攻した人は1人だった。日本語専攻の9人中2人は同じ大学の日本語専攻に属しており、他の7人はそれぞれ異なる大学の出身である。

本語学習成功者に共通する学習行動を引き出す必要がある。収集した協力者 10 人の記述でそれぞれの学習行動をまとめた上で、10 人に重複する類似の学習行動に 1 つの短いタイトルをつけ、学習行動の共通点の 1 つの項目とした。本研究では協力者が 10 人いるため、6 人以上がとった学習行動は「共通」する学習行動と言えると判断した。その結果、20 の学習行動が得られた。それらの学習行動の共通点には学習戦略の使用のみならず、学習の過程や段階という習得の行程における学習行動の変化や特徴も含まれる。それをここでは一つのカテゴリーとして習得の行程と呼ぶ。学習行動の内訳は、学習戦略に関する学習行動が 15、習得の行程に関する学習行動が 5 つとなっている。

そして、学習行動の特徴をより明瞭に捉えるために、6 人以上の重複を条件として抽出した 20 の学習行動の共通点を「学習戦略」のカテゴリーと「習得の行程」のカテゴリーに分けた。「学習戦略」のカテゴリーは、3.3 で調査項目の抽出に用いた Oxford (1990) と O'Malley & Chamot (1990) の学習方略の分類を参考にし、15 の戦略を認知戦略、メタ認知戦略、社会・感情戦略にさらに分類した。学習行動の共通点とその種類、その行動をとった人数（現れる頻度）についてまとめた結果は表 2 の通りである（同数内順不同）。

表 2 学習行動の共通点とその種類・現れる頻度

共通する学習行動 (K)	学習行動の種類	現れる頻度 (人)
K1. 自分なりの学習方法や目標がある	メタ認知	10
K2. 学習計画が具体的で系統的である	メタ認知	10
K3. 人的リソースを積極的に利用する	社会・感情	10
K4. 生のリソースを探して活用する	メタ認知	10
K5. 物的リソースの利用が段階によって変化する	習得の行程	10
K6. 暗記や繰り返しが大事である	認知	10
K7. リアルな日本語を聞く	メタ認知	10
K8. 断片的な時間を活用し、いつも勉強中である	メタ認知	10
K9. 段階によって、人的リソースに対する利用・意識が変化する	習得の行程	10
K10. モデルを真似する（例、発音・文章）	認知	9
K11. 段階によって、インプットとアウトプットそのものの変化またそれに対する意識が変化する	習得の行程	9
K12. インプットだけでなく、アウトプットも必要である	メタ認知	8

K13. 語彙、文法は例文を通して覚える	認知	8
K14. 声を出して練習する（例、シャドーイング）	認知	8
K15. 音声を注意深く聞く	認知	8
K16. いつも自分のことをモニターし、弱点と向き合い、改善に向けて努力する	メタ認知	8
K17. 習得の行程において自律性が育成される	習得の行程	8
K18. 興味があることを学ぶ。興味が一番の良師	メタ認知	7
K19. 自分の感情をコントロールする（例、自分を激励する）	社会・感情	6
K20. 母語の役割を段階によって変化させる	習得の行程	6

4.2 学習行動の種類から見た特徴

次に、表2に基づいて、使用される学習行動を整理した。その結果が表3である。

表3 学習戦略と習得の行程関係を整理した20の学習行動

		共通点番号 (K)	共通点の数	計
学習戦略	認知戦略	K6,K10,K13,K14,K15	5	20
	メタ認知戦略	K1,K2,K4,K7,K8,K12,K16,K18	8	
	社会・感情戦略	K3,K19	2	
習得の行程		K5,K9,K11,K17,K20	5	

2.2で紹介したように、Oxford（1990）は学習戦略を学習に直結する直接戦略と学習を支える間接戦略の2つに大別している。そして、この2つの分類の下にそれぞれ3つの下位区分があり、その区分によると、調査結果の認知戦略は直接戦略に属し、メタ認知と社会・感情戦略は間接戦略に分類される。表3のように、直接戦略は5項目であるのに対し、間接戦略は10項目ある。この数から見ると、本調査協力者たちは直接戦略より間接戦略を多く利用していることがわかる。つまり、協力者たちは日本語そのものの学習より日本語学習を支えるものをより重視しているという特徴がある。成功者たちにおいて、日本語学習の営みに工夫を凝らすということが日本語習得の促進により寄与した可能性が示唆される。

また、学習戦略の使用の他に、習得の行程で学習行動を変化させているという共通的な特徴も見られる。つまり、日本語学習成功者は日本語を習得するために、どのような学習行動を選ばよいか分かっているだけでなく、どの段階でどのような学習行動をとるのが適当かを自覚的に選択しているということである。習得段階によって

学習行動を適切に選択することも成功者の1つの特徴であることがわかる。

4.3 学習行動から見た特徴の類別

4.1の表2によると、日本語学習成功者の学習行動においては様々な共通の特徴が見られる。それらの諸特徴を分析してみると、一定の類似性のもとに分類することができることがわかった。類似性で分類すると、成功者の日本語学習における学習行動は大きく5つに分けることができた。表4の通りである。

表4 特徴の類別とそれに対応する学習行動

特徴の類別	共通する学習行動
1. 日本語の基礎知識や四技能	K6,K10,K13,K14,K15
2. 自己調節能力	K12,K16,K18,K19
3. 身の回りの環境・リソース	K3,K4,K7
4. 自分なりの学習管理	K1,K2,K8
5. 学習の状況・段階への意識	K5,K9,K11,K17,K20

表4に基づいて成功者の学習行動の特徴をまとめると、まず、基盤としての知識や能力に注目していることがわかる。そして、基礎知識などを吸収するだけでは不十分であり、学習をより豊かにするために、身の回りの有利な環境やリソースを利用する。また、日本語学習がいつも順風満帆というわけではないため、自分の学習を管理したり、自分の感情などを調節したりする行動を取っている。最後に、日本語学習は一定不変のものではなく、学習の状況や段階によって変化するものであり、そのような変化に自覚的に対応することも成功者に共通する特徴である。

5 日本語学習成功者の特徴的な学習行動の利用

前節でまとめた特徴的な学習行動を日本語学習成功者が実際にどのようにとってきたかを観察するために、本節では、前節の5つの特徴の類別に基づいて学習行動の具体例¹²を挙げ、成功者たちのそうした行動に焦点を当てて、漢字圏の学習者の有利さという観点も含めて考察していく。

5.1 日本語の基礎知識や四技能をバランスよく養成する

日本語の基礎知識や四技能に関する記述の中には、暗記する、真似する、復唱する、

¹² 学習行動の具体例は、協力者が実際に調査票に書いた回答内容である（原文日本語）。

聞き取る、使い分けるなどといった幅広いストラテジーがある。非常に興味深いのは、本研究の日本語学習成功者は、あるストラテジーをある特定の技能・知識のみに使うわけではなく、ほとんどのストラテジーを四技能や言語項目の幅広い学習に利用していたことである。つまり、日本語の基礎知識や四技能の養成は重要であるが、成功者たちは特定の知識・能力にこだわっているのではなく、全体の能力や知識の均衡に目を向けていたのである。次に、具体例を1つ挙げる。

(1) K10. モデルを真似する

a. 積極的に日本人との会話に取り組んだ。その中でも、主に日本語母語話者の話し方、言葉の使い方やイントネーションを意識しながら寄り添った。

b. 教科書例文を真似て新しく学んだ文法を活用しながら簡単な作文を作成した。

協力者によってモデルを意識的に模倣・真似することに関する記述があらわれる学習時期が異なる。音声に関する記述の中で、モデル音声としては日本人母語話者、テキストの録音、ドラマ・アニメのセリフ、NHK ニュースなど幅広いリソースがあった。また、興味深いのは、モデル音声を真似すること以外に、モデル文章を真似して作文を書く協力者もいたことである。音声にせよ、文章にせよ、いずれも協力者が「モデル」に近づけるように努力していたことがわかる。

5.2 自己調節能力を積極的に発揮させる

日本語学習はいつも順調であるというわけではない。日本語学習で問題に直面する度に、成功者たちは回避するのではなく、いつも前向きな態度を持ってその問題に向き合っている。その過程には、自己モニター、自己反省、感情のコントロールなどを通して、自分の状態を調整し、日本語学習を再び正しい軌道に乗せるという特徴が見られる。このような特徴から、成功者たちは自己調節能力を積極的に発揮させていることがわかった。次に、具体例を1つ提示する。

(2) K16. いつも自分のことをモニターし、弱点と向き合い、改善に向けて努力する

a. その初級の長い時間で一番悩んだことは、なぜ覚えられないかという記憶力の悩みだった。しかし、今から見れば、それは悩むところではないで、言語の学習は時間が経つことこそ勉強できるものだ¹³。落ち着いて一歩ずつ頑張ればできるものだ。

b. 読むのが苦手だった。それは母語の本も同じ、元々は本を読むのが苦手だった。雑誌も、文庫本の小説も、最初本当に大変で、嫌になることもあった。でも、

¹³「今振り返ってみると、(当時悩んでいたことは) 悩む必要がなく、言語は時間をかけて勉強するものだ」という意味。

小説一冊を読み終えた時の達成感を覚え、そこから本をなるべくもっと読むようにした。それから、試験点数ばかり重視し、文法と作文全く努力してなかったことに対し、今はものすごく後悔を感じた。

自己モニターに関する記述を見れば、成功者たちは常に内省していたことがわかる。協力者たちは謙虚な心を持っており、日本語学習における自分の失敗談や弱点を隠さずに述べた。そして、成功者の多くが自分の弱点に向き合うだけでなく、弱点を発見したらそれに対する解決策を出したり、改善したりしていたことが1つの大きな特徴である。

5.3 身の回りの環境・リソースを巧みに活用する

身の回りの環境・リソースを巧みに活用するのは本研究の成功者たちの1つの顕著な特徴である。成功者たちはいつも身の回りの有利な環境を活用し、環境が整っていない時には積極的にリソースを探していた。本研究の成功者に使用されるリソースの中で、物的リソースにはインターネット、アプリケーション、資料などが含まれている。他方、人的リソースには教師、日本語母語話者、社会コミュニティなどがある。次に、具体例を1つ提示しながら説明することにする。

(3) K3. 人的リソースを積極的に利用する

- a. 日本人の友達ができたので、私の方が日本語で、日本人の友達の方が中国語でお互いに練習してきた。日本語コーナーにも参加してきた。日本人の先生が、面白そうな話題を出して、みんなは日本語でディスカッションをしてきた。
- b. スピーチ大会で選抜してくれたから、日本人の先生が一年間で密着に指導してくれた。日常の会話がもちろん、スピーチなど正式な場面でもしっかり話せるように指導してくれた。

人的リソースの活用については主に2種類に分けられる。第1に、日本語を話すコミュニティに参加することが挙げられる。日本語を話す機会を積極的に探すのは全員に共通する点であり、よくあるのは日本人の友達を作ったり、日本語コーナーやイベントに参加したりすることである。第2に、他人に支援を求めることである。多くの協力者は問題に直面した時に自分より日本語能力の高い人（母語話者、先生）に質問したり、解決策をもらったりするというストラテジーを使用していた。以上の議論から、成功者にとっては他人との協働学習や他人からの支援が不可欠ことがわかる。

5.4 自分なりの学習管理を青写真から細部まで運営する

本研究の成功者たちの日本語学習は自学自習が主となっており、教室での学習より教室外での自主的な学習が圧倒的に多い。成功者たちは他の人の学習行動を模倣するので

はなく、自分に適合するものを模索するのが得意である。また、成功者たちは日本語学習という大きなフレームに、具体的な内容物を秩序立てて埋め込んでいるという特徴が読み取れる。例えば、学習管理について、日本に留学することを長期目標とする一方、短期目標としてはN2やN1に合格することを設定している。このような目標を達成するため、体系的な計画を詳しく立てている。以下に、具体例を挙げながら説明する。

(4) K2. 学習計画が具体的で系統的である

- a. 毎日できるだけ多くの単語を覚えるように N1 の単語本を日ごとに 100 個覚えた。単語だけではなく、慣用句や熟語も覚える。NHK を毎日聞く。
- b. この頃 (2017 年) から卒業後の進路を考えて、留学を決めた。そのため、とりあえず N2 を取ろうと思った。N2 試験で多く出来ている単語本を買って毎日一節を覚える。文法の本もあるので、毎日一節を覚える。次の日が新たな文法を覚える前に、目次を見て前日覚えた文法の意味、接続、例文を復唱する。

この学習行動は協力者の全員が学習段階を越えて行っていたものである。全員の計画に関する記述を概観してみると、一番の特徴は具体的で系統的であることと言える。「具体的」とは、具体的な単語数や勉強時間まで述べられていることである。そして、「系統的」とは、「毎日～を勉強している」「次の日～」のようにきちんとした計画を立てて実行していることである。また、計画の記述においては、協力者は自発的に自分なりのプランを立て、各自の目標 (K1) に向かって頑張り続けていることが窺える。

5.5 学習の状況・段階への意識を維持して行動を調整させる

日本語学習成功者にとっての日本語学習は一定不変なものではなく、学習の状況や段階が変化するものであるという意識を常に持っている。そして、その自覚により、成功者たちは学習行動を習得の行程に相応して変化させている。

まず、分析を通して、5つの習得行程での学習行動がそれぞれどのような特徴を表すかを表5にまとめた。この表から、成功者たちはどのような戦略をとるのかのみならず、学習の状況や段階に応じての学習行動がどのような共通する規律に従って変化するのかもよくわかる。

表 5 習得の行程とその学習行動の特徴

習得の行程	習得行程における学習行動の特徴
K5. 物的リソースの利用が段階によって変化する	物的リソースの種類や内容の変化： 「単一→幅広くなる→深くなる」
K9. 段階によって、人的リソースに対する利用・意識が変化する	人的リソースの範囲： 「身近の人たち→社会の人たち」と広がっている 人的リソースの利用： 「擬似的な会話練習→母語話者がいるコミュニティに参与する」
K11. 段階によって、インプットとアウトプットそのものの変化またそれに対する意識が変化する	インプットとアウトプットへの意識： 「インプット→インプット+アウトプット」
K17. 習得の行程において自律性が育成される	「低い(授業や教師の指示に従う)→高い(自分でリソースや練習機会を探す)」
K20. 母語の役割を段階によって変化させる	「母語に頼る→母語に頼らない」

ここで「K5」「K20」を取り上げ、その習得の行程を学習段階の「初・中・上級」ごとに挙げ、1人の協力者の記述内容を1つの具体例として説明する。

(5) K5. 物的リソースの利用が段階によって変化する

[初級]

教科書の文章を文ごとに区切って、その文法を明らかにする。そして助詞などについて、なぜそれを使ったのかを自分で説明する。

[中級]

ドラマが大事だ。そして、NHK ニュースの単語の意味を明らかにすることも大事だと思う。

[上級]

朝日新聞、専門書、論文を読んで、(スキミング)意味がわかればいい。これは何について話しているのか主要内容を明らかにする。

成功者たちの記述から、物的リソースの種類や内容の変化は「単一→幅広くなる→深くなる」という傾向があると言える。初級の時には教科書や授業で配られたテキストを使って基礎知識を学ぶ場合がほとんどである。中級になると、ほぼ全員が日本語能力試験を受けるが、受験勉強用のリソースが主となるのではなく、日本語能力を全面的に高めるためにドラマ・アニメ・ニュース・小説などの多様で幅広いリソースを探して活用

することに重点が置かれる。そして、上級に至ると、協力者たちが触れたリソースの種類は中級より限定的になり、内容についても専門的・アカデミックな深い領域に入るようになる。また、中・上級のリソースのほとんどが生のリソースである。以上のような傾向から、日本語能力の向上に伴い、成功者はリソースの内容と種類の単一化を避け、専門性などを追求していたことがわかった。

(6) K20. 母語の役割を段階によって変化させる

[初級]

漢字のおかげで語彙の学習はそれほどきつくなかった。

[中級]

メモを取る時に、日本語の解釈などを母語にした。時間節約、便利だと思った。

[上級]

母語をあんまり活用していなかった気がする。

「母語の活用」に関する項目の回答から見ると、習得の行程においての傾向は大まかには「母語に頼る➡母語に頼らない」となっている。日本語を学習する最初の段階には、母語の中国語は媒介語として重要な役割を果たし、漢字を共有しているという利点は日本語学習を推進していたことがわかる。しかし、ほとんどの協力者は上級に至ると、母語をあまり使わないようになっていた。その中で、多くの協力者は「母語に頼らず」のような内容を記していた。高いレベルに到達すると、日本語で日本語を理解・学習することが求められるようになっていた。

最後に、以上5つの習得の行程における変化の特徴を関連づけてみると、成功者たちは漢字の共通性に基づく有利さを活用していたことが窺える。つまり、成功者たちは早い時期から教科書や授業で配られたテキストなどの書記日本語のリソースを中心に利用し、その中で、特に母語の漢字を利用して語彙を習得し、漢字のおかげで日本語の内容理解が容易になったと語られることが多かった。そして、学習段階が上がるにつれて、成功者たちは書記日本語以外に、音声日本語の重要性も認識し、徐々に音声日本語に移行していくという傾向が見られる。具体的には自主的にドラマ・アニメ・NHK ニュースなどの音声日本語のリソースを活用したり、積極的に日本語の実践の場を探して会話練習したりすることである。成功者のこの学習行動の軌跡は、2.1 で言及した書記日本語を優先的に学習し、その後に日本語を音声化するという学び方と一致している。ここから、中国語母語日本語学習成功者たちは、その漢字の共通性に基づく大きな有利さをどのように活用しているかがわかる。この大きな有利さを活用した上で、前述のような利用可能な学習行動を適切に使用することで、中国語母語話者の日本語学習はさらに促進されるだろう。

6 おわりに

本研究では中国語母語日本語学習成功者の学習行動において、どのようなストラテジーを使用してきたかを引き出したのみならず、従来の研究では重視されてこなかった習得の行程による学習行動の変化や特徴についても明らかにした。

そのように学習行動を抽出した上で、中国語母語日本語学習成功者の学習行動における特徴は何か、それらの特徴的な学習行動が具体的にどのように利用されるのかについて検討した。まず、学習行動の種類から見ると、成功者たちは直接ストラテジーよりも間接ストラテジーを重視すること、状況や段階によって学習行動を適切に選択することが特徴的である。そして、学習行動は一定の類似性に基づいて5種類に分類することができた。その5つの特徴の類別に基づいて、成功者たちの学習行動の具体例を挙げ、それらの利用の実態に焦点を当て、漢字系学習者の有利さという観点も含めて考察した。その結果、成功者たちは早い時期には書記日本語のリソースを中心に利用して日本語を理解し学習していたが、学習段階が上がるにつれて、書記日本語以外に音声日本語の重要性も認識し、徐々に音声日本語の学習に移行して、様々な物的及び人的リソースを活用して学習を巧みに調整して学習を進めることが明らかになった。本研究は、その規模においても、異なる種類の集団との対比においても課題が残るものだが、これまで手がつけられずに置かれてきた、漢字の共通性という有利さを持つ中国語母語日本語学習者の学習行動の研究に一定のデータと示唆を提供することができるだろう。

参考文献

- 大関浩美 (2010) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』 くろしお出版
- 小森和子 (2013) 「日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響—中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して—」『明治大学国際日本学研究』第6巻第1号,91-115.
- 呉麗楠・磯村一弘ほか (2016) 「JFL 環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得—中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に—」『音声研究』第20巻第1号,6-15.
- 竹内理 (2003) 『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究—』松柏社
- 中上亜樹 (2015) 「文理解における日本語学習者のストラテジー使用に関する研究—インプット処理ストラテジーに着目して—」『21世紀アジア学研究』(13), 75-87.
- 菱沼透 (1983) 「日本語と中国語の常用字彙」『中国研究月報』428,1-20.
- 吉田ひと美 (2017) 『外国語習得に成功する学習プロセス—留学することなく身につけるために—』大阪大学出版会
- Cohen, A. D. (1998). *Strategies in Learning and Using a Second Language*. New York:

- Addison Wesley Longman.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The Psychology of the Language Learner Revisited*. New York: Routledge.
- Zeevaert, L & Thijs, J. D. ten (2007). *Receptive Multilingualism: Linguistic Analyses, Language Policies, and Didactic Concepts*. John Benjamins Publishing.
- O'Malley, J. M. & A. U. Chamot (1990). *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.
- Rubin, J., & Thompson, I. (1982). *How to Become a More Successful Language Learner*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Stern, H. H. (1975). What can we learn from the good language learner? *Canadian Modern Language Review*, 31, 304-318.
- Thu, T. (2009). Learning Strategies Used by Successful Language Learners. *ERIC*, ED507398.
<<https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED507398.pdf>> (最終閲覧日 2020 年 11 月 20 日)